

～社会教育という名の幸せのレシピ～

泣いて、嫌がる母を施設にいれた。

母は、なにもない戦後の時代の中で、唯一楽しみにしていたのが、公民館での様々な講座だった。

お金のない人も、一人ぼっちの人も、みんなが集い、学校に行けなかった人も公民館で、学び、幸せになって明日という日々を希望をもって生きていた。

「おかあちゃん、施設は公民館やぞ！ 仲間もおるぞ！」

そう嘘を言って施設にいれた。

別れ際に、不安げな顔をして、泣いていた母の顔が忘れられない。

あれから6年。

施設で歌をうたい、書けなかった文字を覚え、仲間と共に、日々行われる施設での講座で、幸せの時を刻んでいる。

しあわせになるために社会教育はあって、独りにならない・一人にさせない仕掛けがある。

いわば、しあわせのレシピのようだ。

教育は、学校教育・家庭教育・社会教育などがあるが、分断されつつある社会の中で人をつなげること、学ぶ喜びをいくつになっても感じる事ができるのは、社会教育の力だと思う。

社会教育は、だれもが幸せになるための教育であると確信している。

泣きながら、施設に入った母は、今は、笑顔で「高校3年生」を歌い、僕を迎えてくれる。

一緒に歌ったら、なぜだろう自分が泣いていた・・・・・・